
となりの彼女

ビッキー・ホリディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりの彼女

【Nコード】

N5612V

【作者名】

ビッキー・ホリデイ

【あらすじ】

放課後、部活が終わり教室に戻ると、僕が思いを寄せている女の子がうずくまっていた。声をかけて話を聞くうちに、彼女が普通ではないと思い始める。気が触れてしまったのか、と思ったが、どうやらそうではないらしく、この小説は「ブックログ」にも投稿しています。

部活の活動時間も終わり生徒が居なくなつた校舎の情景は、昼間
見ているものとは違いどこか神秘的ですらあつた。

僕は女子ばかりの吹奏楽部の活動を終えて、鞆を取りに教室へ向
かつた。長く延びている中廊下をひとり歩いてみると、窓からじ
んわりとにじみ出るように差し込む西日が目をしばたつかせた。僕
以外誰も居ないなか、上履きの底と床が擦れてキュツキュと鳴って
いる。

そのリズムに合わせるように、僕は軽く今日練習した曲をハミン
グしていた。女子ばかりの部活だから、派閥争いやかげぐち、男子
禁制のガールズトークを耳にしてしまつたり、なにかと苦勞が絶え
ない。今日だつて個人練習をしていたら、同じパートの女子がやつ
てきてグチグチグチグチ、あいつはこうだから嫌いだの、あの人と
あの人はもうセックスをしたらしいだの言っていて、僕は辟易とし
てしまつた。

よく自分でもこんな状況で部活を続けているな、と思う。別に部
活に青春を捧げるつもりでもなく、ただ中学でやってきたからとい
う理由で入つただけなのに。でも、僕は昔からなにかを始めると長
く続けられるタイプだ。根気強いというよりは、ただ辞めるのが億
劫なだけなのだけだ。

中廊下の突き当たりを右に折れると、教室が並んでいる。もう少
し早い時間だとカップルが教室でささやかな愛を育んでいたりする
のだけれど、今日はそんな気配は感じられなかった。もっとも、僕
は不可抗力で見てしまうだけで、他人のそういつたことは興味がな
い。

薄暗い教室に入ると、奥の窓のカーテンが漂うように揺れていた。
冷たい風がやんわりと僕の頬を撫でた。日直が閉め忘れたのだろう。
まったく不用心な。まあ、ここは三階だから心配が無いといえれば無

いけれど。

窓に向かつて歩くと、窓側の机の影になつているところで女子が、体育座りで膝に顔を埋めるようにうづくまっているのが見えた。僕は驚いてのけ反り、尻で机を倒してしまった。机が床に叩きつけられる音が教室中に響き渡る。それでもうづくまっている女子は微動だにしなかった。

なにをやっているんだこれは。声を掛けるべきか否か。知らぬ振りをするには少し無理がある。それでなくてもこんなところでおこなことをやっている女子を前にして、心配にならない方がおかしい。僕はどうしたの、とできるだけ緊張を隠しながら声を掛けた。うづくまっていると床に届きそうなくらい長い黒髪が、ゆっくりと揺れる。それを細い指でかき分けると少しつり上がった目が現われた。彼女は同じクラスで席が隣の、あまり目立たないタイプの女子だった。いつも興味無さそうに授業を受けて、休み時間はひとりでなにか本を読んでいることが多かった。友達は何処に居るのか居ないのかわからないけど、僕は彼女が誰かと一緒に居るところを見たことがない。雰囲気は清楚な印象で、僕は春に彼女を知ってから、密かに思いを寄せていた。

目が合った。だけど、彼女の焦点がどこにあるのかわからなかった。確かに目は僕を捉えているのだけれど、彼女は僕という存在を認識していないようだった。

ボソボソと彼女が口を動かした。聞き取れずに僕がなに？ と訊ねると、彼女はわたし、いま、楽しいの、と単語ごとに区切って言った。僕はわけがわからなかった。楽しい？ 僕がそう訊くと、彼女は大仰に首肯した。

なにが？ 僕はそう訊いた。彼女は体育座りの体勢で、顔だけ僕に向けている。チラと下を見ると彼女の無垢な太ももが見えた。この姿勢だと思つて根のところまで見えて、僕は妙に意識してしまい、なんだかそのまま見ていたら、彼女を穢してしまうような気がしたので後ろ髪を引かれる思いでそつと目を逸らした。

彼女は僕のそんな思いを知るよしもなく、あなたもやってみる？
と言い、端正な顔にうつすらと微笑を浮かべた。僕は彼女の言っていることが全く理解できなかった。やってみる？ とはどういうことだろうか。

僕が茫然と立ちすくんでいると、彼女はちよつとここに座って、
と言って僕の腕を引つ張つてきた。彼女の手は、柔らかくて温かかった。腕から伝わる彼女の優しい感触、僕はそれだけで心が満たされるような、ひび割れた大地が雨水を吸って蘇るような、そんな感じがした。もうほかににも要らないと思った。

されるがままに僕は彼女の横に座った。お互いの肩が触れるほどの至近距離で、僕は彼女の顔を見ていた。放課後の、薄暗くて人気が無い教室で僕らは寄り添うように座っている。彼女の髪がなにかの拍子で揺れるたびに、甘く華やかな香りがした。彼女は床の一点をじつと見つめていたかと思えば、ふつと目を閉じて僕の肩に頭を乗せてきた。彼女の髪が僕の頬をくすぐる。僕は身体が溶けてしまひそうな気がした。

密かに思いを寄せていた女の子が、こんなことをしてくるなんて。このまま時間が止まってしまえばいいとさえ思った。やがて彼女はゆつくりと頭をもたげた。

わたしは、ね、唐突に彼女が切り出した。いま学校がすごくつままないの、先生も生徒もみんなバカだからわたしの話を聞いてくれないの、聞いたとしても理解ができないの、わたしはね学校にいるあいだ喋らないでしょう、それはね彼に喋るなつて言われてるからなの。

そこまで聞いて一瞬にして、僕の心の中で打ち付けていた波がさあつと引いていき、静寂が支配した。なんなんだよ、からかわれていただけだったのか。

こんなことをしていたら彼氏に悪いよ、僕がそう言つと彼女はふふふつと笑った。彼氏なんかじゃないわよ、わたしが言つた彼つていうのはそういう意味じゃないのよ、ジエネラルな意味での彼つて

こと、つまり代名詞、heの彼ね。

突然、ジェネラルなんて言葉が出てきて、僕は一瞬意味が取れなかった。でも、恋人は居ないようだったことがわかったので、僕はまた緊張してしまった。

彼女は続けた。その彼はねいつもわたしを見張ってるの、だからわたしは彼の言うとおりにするの、わたしは彼に出会ってから毎日が楽しいわ、学校以外はね、学校はつまらないわ、だってバカばかりなんだもの、その点あなたは好きよ、あなたはバカじゃない、だからあなたも楽しくなりましょうよ、きつと気に入ってくれると思うわ。

彼女は上半身だけ僕の方に向けて、僕の頬を両手で包むようにして添えた。目を閉じて、彼女にそう言われ、僕はそれに従った。感覚でだけ、彼女の顔が徐々に僕の顔に近づいてくるのがわかった。僕は為す術もなく流れに身を任せた。憧れであった彼女とこんなことができる日が来るなんて、と僕の心ではやってやったぞというような達成感と、取り返しのつかないことをやるうとしているような罪悪感がせめぎ合っていた。

軽く彼女の唇が僕の唇に触れた。ついにやったぞ、という気持ちに浸る間もなく、そのまま彼女は唇を押しつけてきた。彼女がこんなにも情熱的で積極的だとは思ってもよらなかった。僕は驚きながらも、ほかの人は知らない僕だけが知っていることがひとつできた気がして、優越感を抱いた。

んっ、と彼女が呻くように息を漏らした。その色っぽい声に、理性のタガが外れそうになったけどなんとかそれを抑えていた。僕の唇に、なにかヌメヌメとした生き物のようなものが這った。すぐにそれが彼女の舌だとわかった。さすがにこれにはうるたえたけど、強引に唇を開けられ、互いの舌が絡んだ。そして彼女は自分の舌を僕の喉の奥まで入れてきた。反射的になにかを飲み込む動作をする、彼女の舌はまた僕の舌に絡みついてきた。生温かい感触と言いたいようのないこのダメになりそうな、墮落していくような感じで僕は

世界の終わりを見たような気になった。

乱暴でいて繊細な彼女のディープリキスに酔い痴れていると、なんだか僕も攻めてみたくなってきた。僕は唇を離さずに彼女の肩を抱き、崩れ落ちるように彼女を倒した。そして彼女の口の中に容赦なく舌を這わせた。右の奥歯から歯茎をなぞるように愛撫して、また舌を絡ませる。軽く彼女の舌を吸うと、彼女が男を誘うような声で喘いだ。

そつと彼女のスカートの中に手を入れると、彼女はゆっくりと僕を押しつけて、これ以上はダメだよ、と小さく笑った。

最初は生殺しにされた気でいたけど、ため息をひとつつくと僕は教室でなにをしようとしていたのだろうと、我ながら怖くなった。

これであなとも楽しくなれるわよ、そう彼女は言っ、立ち上がった。そろそろ帰りましょ。

僕は彼女の顔をまともに見ることができなかった。神経が昂ぶり、心臓は激しく脈打ち、なんでもできるような気がした。口の中にまだ彼女の舌の感触があり、さっきのことを思い出す度について、顔がほころんでしまうのがわかった。

彼女はそんな僕の気持ちなどつゆ知らず、すましていた。二人で教室を出るともう外はすでに日が沈んでいて、廊下は蛍光灯が点いているのに薄暗く、不気味だった。夜の校舎って怖いよね、僕がそう言つと、わたしは好きだけどなあ、と彼女が言った。この広い校舎に誰も居なくて静かでせいせいするわ。

そう言う彼女はどこか楽しそうだった。こんなに楽しそうな彼女は見たことがなかった。僕にだけ見せてくれる、そう考えるとまるで腑抜けになったような、背骨を無くしたような、煮込みすぎた野菜のようにその場にグズグズとへたり込んでしまっようになった。

校舎を出ると、グラウンドの方から乾いた風が吹いてきた。冷たく刺すような風だったけど、僕はまだ興奮冷めやらぬままだったので、寒さは感じなかった。

ねえ、校門のそばで僕は立ち止まると彼女も歩みを止めた。彼女

は僕の顔をじつと見て言葉を待ってくれていた。あのさ、なかなか次の言葉が出てこない。もうあんなことまでしてしまったのだから今更なにを恐れているのか。そう自分に言い聞かせて言った。僕と付き合ってください。

なぜここで告白をしたのかは、自分でもわからなかった。ただ、僕には今日このときが千載一遇の好機だと思った。あんなことをしたのだから、という責任感も多少はあった。

僕に引き替え、彼女はあっさりといいよ、と言ってくれた。あまりにさらっと彼女が言うので、僕は本当に、と訊いてしまった。彼女は本当に、とおうむ返しで応えた。

こんなにもうまくいくものなのか。僕はいつそのまま死んでしまってもいいと思った。こんなに楽しくて、幸福感に包まれて死ぬ人はそうそういないだろう。

校門を出てすぐのバス停に、ちょうど駅までのバスが来ていた。僕らは走ってそれに乗り込んだ。多少息を切らしながら空いている席に座ると、思わず笑い転げてしまいそうになった。特になにが、というわけではないけど、ものすごく可笑しくて仕方がなかった。クツクツ、と僕が笑いを殺していると、横に居る彼女が楽しくなってきたね、と言った。僕はこのバスが、まるで天国へ向かっていくかのような、そんな気がした。恋人ができるとこんなにも楽しいものなのか。僕は窓に映る景色でさえ、平和を具現化したような、遊園地のアトラクションのように楽しそうに見えた。

部活のコンクールなどで演奏しているときでもこんなに気分が高揚して、楽しいと言えることは無かった。ねえいま僕すごく楽しいよ、僕は彼女にそう言った。本当に？ これで仲間になれたね、彼女は嬉しそうに笑った。悩みとか不安とかどうでもよくなったでしょう、わたしも彼を知ってから毎日が楽しいの、言ってる意味がわかった？ わたしはあなたにも会えたからいまとても幸せよ。

バスが駅に着いて停留所に降りたときも、まるで花畑に来たような気分だった。彼女の言っていた通り、普段抱いている悩みや不安

などはどこかへ消えていた。

駅で僕らは別れた。また明日ね、僕はそう言っただけで彼女を見送った。彼女は真っ直ぐ改札へ向かい、やがて人の波に消えていった。僕は自宅の方面のバスを待った。停留所には数人、先に待っている人が居た。みんな疲れていてちっとも楽しそうではなかった。僕はこんなに幸せなのに、と思うとどうにかして幸せを分けてあげたくなかった。

バスが来て、僕は後方の二人掛けの席に座った。気持ちはまだ冷めない。家に帰ったときもこんな様子だったら、親はなんて言うだろうか。普段とは違う僕を訝るだろうか。恋人ができたのではと察するのだろうか。しかし、そんなことはどうでもよかった。誰がなると言おうと、僕には関係がない。

バスに揺られている間、僕はさっきしたキスを思い出していた。あんなに激しいキスは初めてだった。彼女も、大人しそうな外見とは裏腹に、あんなに男をダメにさせるようなキスをするなんて。実は初めてではないのだろうか。そうだとしたらシヨックだ。でもいまはそれすらも簡単に許容できるほど、楽しくて仕方がなかった。

帰宅して、晩ご飯を食べているときも、風呂に入っているときも、寝る準備をしているときも、僕は彼女のことを考えていた。考えれば考えるほど、愛おしくて狂おしかった。明日になればまた学校で会える、そう思うとすぐにでも寝てしまいたかったけど、まだ寝るには早い時間だからか、とても寝られなかった。

枕元の携帯電話が鳴った。そういえば僕は、彼女の連絡先を知らない。恋人同士ならいまの時代、知らない方がおかしい。明日会ったら訊いてみよう。

電話を取ると、今日の活動中に僕に愚痴をこぼしていた女子からだった。電話だなんて珍しいな、と思ったけど深くは考えずに応答した。

電話の向こうの女子の声はひどく落ちこんでいた。いや、落ちこんでいたというよりは厳粛だった、と言った方が正しいのかもしれない。

ない。女子は言葉を選んでいようで、なかなか本題が見えてこなかった。根気強く聞いていると、どうやら彼女、僕の恋人が死んだらしい。

僕は言葉が出なかった。もしもし、もしもし、と声を掛けられ、ようやく返事をした。シヨックではあったけど、それとは別に心のどこかでまだ気持ちが昂ぶっていて、落ちこみたくても落ちこめないう状態だった。そういうわけだから明日は朝一で学年集会だって、女子は努めて悲しそうな声で言っていたが、僕には事務的な感がチラチラと見えてとても不快だった。

彼女が死んだ。下校途中に駅のホームから落ちてちょうど来た電車に轢かれたらしい。つまり僕と別れてすぐの出来事だった。自殺なのか事故なのかはわからないけど、とにかく僕は彼女を失ってしまった。

今日初めて見た彼女の楽しそうな笑顔や、彼女とのキスの感触、普段の退屈そうな様子、そうだったものが次々に思い出されていった。でもそれも、もう二度と見られない。せつかく恋人同士になれたのに。なんと残酷な、むごい仕打ちだろう。

涙が自然とこぼれた。それから僕は大声で笑った。やぶれかぶれだった。もう、あとは野となれ山となれ、明日からのことなんて風まかせだ。

楽しくなくなっちゃった？ どこからか声が聞こえた。その声を聞いた瞬間に、僕はそれが彼女のものだと気づいた。楽しくなくなっちゃった？ もう一度聞こえた。楽しいわけないよ、最悪な気分だよ、僕はそう応えた。そんなこと言わないで、わたしは楽しいよ、彼女のうっすらと微笑んでいる顔が目に見えた。僕は君が居なくなつて寂しいよ、僕が言っていると彼女が応えた。寂しくなんかいいわ、わたしはここに居るんだから、だからねえ泣かないで、寂しいなんて言わないで、僕はそれを聞くと指で涙を拭いた。

そうか、と僕は呟いた。彼女の言う通り、僕は寂しくなんかいい。そうだ、その通りだ、彼女なら居るじゃないか、僕は彼女にありが

とう、と言った。彼女はふふつと笑った。
それだけでよかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5612v/>

となりの彼女

2011年8月7日03時25分発行